

# JAPAN APIC

Since 1975

一般財団法人  
国際協力推進協会 会報

No.013

2021年7月・2022年1月 合併号



CONTENTS

01 ごあいさつ

太平洋事業

03 APIC-MCT 協力事業  
ミクロネシア連邦ポンペイ州 貯水池・給配水設備改修プロジェクト支援

04 APIC-MCT 協力事業  
ミクロネシア連邦チューク州 サンゴ礁モニタリング・プロジェクト支援

カリブ事業

05 UWI セント・オーガスティン校 言語学習センター受講生が上智大学 January Session に参加

06 トリニダード・トバゴでの日本語スピーチコンテスト支援

07 日・カリコム友好協力基金支援  
カリブ公衆衛生庁へ PCR 検査キットの寄贈

INTERVIEW

08 西インド諸島大学 (UWI) 卒業生 ボビー・スウカーさん

第7回「ハイチ便り」：ハイチの経済社会情勢

11 その1-2 (現状と課題：「各論」) ～基本的な社会サービスの現状と課題について～  
寄稿：八田 善明 在ハイチ日本国大使 (当時)

留学生支援事業

15 ザビエル留学生・APIC-MCT 留学生

大使だより

19 トリニダード・トバゴとの関係拡大の潜在力あり

寄稿：平山 達夫 駐トリニダード・トバゴ大使

21 ミクロネシア連邦パニュエロ大統領から  
APIC 佐藤嘉恭前理事長に感謝の書簡

22 APIC 早朝国際情勢講演会・APIC 役員名簿

23 令和2年度事業報告書・決算報告

25 令和3年度事業計画書・収支予算

今号の表紙写真



マーシャル諸島共和国 ジャルート環礁

撮影者：フロイド・K・タケウチ

Photo Courtesy Floyd K. Takeuchi / Waka Photos

いじめられっ子

皆さん、こんにちは。APIC理事長の重家俊範です。

9月の臨時理事会で、理事長を仰せつかることになり、同月24日に就任いたしました。佐藤前理事長には長きに亘りAPICの活動を積極的に主導して頂き、お礼を申し上げます。

APICには長い歴史があります。日本と諸外国の相互理解と国際開発協力の推進のために1975年に発足、その後の法律改正により、2013年4月一般財団法人国際協力推進協会に移行、活動してきています。具体的には、①太平洋島嶼地域、カリブ地域における国際開発協力の支援事業、②外務省幹部などによる国際情勢講演会、③国際協力懇話会(とくに地方との連携)、④「上智大学・APICザビエル高校留学生奨学金」など留学生の支援、⑤国際協力に関心ある若い世代の育成の活動等を行っています。

島根県隠岐郡海士町では、同町役場の協力を得て同町にある県立隠岐島前高校の皆さんとAPIC寄付講座「夢ゼミ」を開催しています。同町の皆様と御一緒に活動する機会を得ていることを大変うれしく思っています。先日大江和彦町長とお話しする機会がありました。島の発展のために尽力されておられることに感銘しました。本年8月に開催された東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンとしてミクロネシア代表団やパニュエロ大統領をお迎えされる予定でしたが、コロナ対応のために中止になったのは大変残念でした。私は嘗て外務省の大洋州課に勤務、南太平洋の島嶼国に関する仕事をしたことはありますが、今回太平洋やカリブ海の国々との関係強化に携わることができることにしています。

道関係者の招聘活動等は、海外との往来が難しくなったため、残念ながら全面的にストップしてしまい、留学生は海外からオンラインでの授業を受けざるを得ない状況となりました。また留学を終えた学生が本国へ帰国することもままならなくなった事例も発生しました。他方で今回コロナ禍は、これ迄世界でどれだけ濃密な国際往来が進行していたのかを再認識する機会にもなったと思います。11月には新たにオミクロン株の感染が南アで報告されましたが、早期にコロナ禍を制御しフルに活動ができる時が戻ってくることを切に願っています。今後ともご支援を頂きますようお願い申し上げます。



重家 俊範  
理事長

2021年12月

一般財団法人国際協力推進協会 (APIC)

APICの主な動き [2021年1月～12月]

- 1月 西インド諸島大学 (UWI) セント・オーガスティン校の言語学習センター受講生が上智大学 January Session に参加
- 3月 第2期 APIC-MCT 留学生ラジキットさんが上智大学大学院を卒業
- 4月 第372回早朝国際情勢講演会 (講師：前駐サウジアラビア特命全権大使 上村 司氏)
- 5月 APIC-MCT 協力事業 ミクロネシア連邦ポンペイ州の貯水池・給配水設備改修プロジェクト支援  
第373回早朝国際情勢講演会 (講師：前駐インドネシア共和国特命全権大使 石井 正文氏)
- 6月 第374回早朝国際情勢講演会 (講師：公益財団法人フォーリン・プレスセンター理事長 (前欧州連合日本政府代表部特命全権大使) 兒玉 和夫氏)
- 7月 第375回早朝国際情勢講演会 (講師：前駐中華人民共和国特命全権大使 横井 裕氏)
- 9月 第376回早朝国際情勢講演会 (講師：独立行政法人国際交流基金理事長 (前内閣官房 TPP 等首席交渉官、元駐イタリア特命全権大使) 梅本 和義氏)  
第4期ザビエル留学生シヨーンさん・第2期 APIC-MCT 留学生エルウンさんが上智大学/大学院を卒業  
第5期 APIC-MCT 留学生タラさんとナターシャさんが上智大学大学院に入学
- 10月 日・カリコム友好協力基金支援 カリブ公衆衛生庁へ PCR 検査キットの寄贈  
第377回早朝国際情勢講演会 (講師：前駐アメリカ合衆国特命全権大使 杉山 晋輔氏)  
トリニダード・トバゴでの日本語スピーチコンテスト支援
- 11月 第378回早朝国際情勢講演会 (講師：外務審議官 (経済) 鈴木 浩氏)
- 12月 第379回早朝国際情勢講演会 (講師：外務省 地球規模課題審議官 (大使) 小野 啓一氏)

APIC・MCT協力事業

## ミクロネシア連邦ポンペイ州 貯水池・給配水設備改修プロジェクト支援



上：修復前のダム  
下：改修されたダム



APICは、ミクロネシア自然保護基金 (Micronesia Conservation Trust: MCT) から協力要請を受け、ミクロネシア連邦ポンペイ州南西部にあるキチ地区ウォン村の貯水池・給配水設備改修のための支援として、2万ドルの寄付を行いました。

ウォン村には千人以上が暮らしており、ほとんどが農家と漁師です。ポンペイ州の中で最も大きな村の一つですが、ダムや集水、配管設備が脆弱に造られていることから、長い間、安心して飲める水の確保ができず苦しんできました。現在ポンペイで発生している干ばつにより、この問題はさらに深刻になっていきます。ウォン村には二つの給水システムがありますが、土砂くずれが起きやすい場所に建設されているため、どちらも正常に機能していません。実際に、数年前に起きた土砂くずれにより、ダムは部分的に土砂にうずまれています。

国際移住機関 (International Organization for Migration: IOM) は、このうちの一つの設備を修復することに合意しました。これでウォン村の人口の半分に水を供給することができます。そこでAPICは、もう半分



完成記念式典にて、ダムの前で祈りの儀式を行う村人たち

の村人たちにも水を供給できるように、もう一か所の設備の修復を支援することになりました。今回の支援により、飲料水を介してよく感染症にかかってしまうウォン村の人々の健康向上に繋がることが期待されます。

2021年5月29日にはダムの完成を記念する式典が開催され、村人たちが集う中、祈りの儀式が執り行われました。

APICは今後も引き続き、MCTと協力しながらミクロネシア地域の環境改善に取り組んでまいります。

## APIC・MCT協力事業 ミクロネシア連邦チューク州 サンゴ礁モニタリング・プロジェクト支援

APICは2020年4月、ミクロネシア自然保護基金 (Micronesia Conservation Trust: MCT) から (Chuuk Conservation Society: CCS) に環境保護のためのダイビングキット等の購入や研修のための費用として1万ドルを送金しました。

今回APICが送付した支援金は、ワークショップ、学習交流会、研修等の開催や、サンゴ礁のモニタリング実施のための船の燃料、会場費、飲食費



チューク州のサンゴ礁

のほか、ダイビング用品の購入などとして、継続的に活用しているという報告がありました。

た、チューク州を先導する保全NGOで、海洋および陸地の遺産を保護し持続的に管理するため、地域のコミュニティを支援しています。

この度のサンゴ礁モニタリング・プロジェクトの目的は、①チューク州のコミュニティにおいてサンゴ礁のモニタリングができるシステムを提供すること、②海洋保護区の管理組織間の協力を強化すること、③実際のモニタリング活動を通じて、地域の保全関係者と交流の機会を持つことで、それぞれの能力の向上や、ネットワーキングを行うことです。

このプロジェクトは各コミュニティと連絡を取りつつ、それぞれのリーダーが資源保護や生態系管理において自身にどのような役割があるかを考えるきっかけとなる影響を与えることが主な目標です。今回のAPICからの支援により、CCSは資源保護方針やその実践に関する定例会議の機会を維持することができるようになります。



購入した備品



ダイビング研修中の様子

# UWIセント・オーガスティン校言語学習センター受講生が上智大学 January Session に参加

※オンライン版

2021年1月8日〜1月29日の間、西インド諸島大学(UWI)セント・オーガスティン校の言語学習センター(Centre for Language Learning)日本語講座受講生が、上智大学のJanuary Sessionに参加しました。

APICでは2016年より毎年1月に「太平洋・カリブ学生招待計画」として、太平洋およびカリブ島嶼の大学生を日本へ招待しています。招待学生は約一カ月間日本に滞在し、上智大学が主催する短期プログラム January Session in Japanese Studies(以下、January Session)に参加します。

しかし、6回目を迎える2021年度のプログラムでは、新型コロナウイルスの感染拡大のため学生の来日はかなわず、January Sessionも全オンラインでの実施となりました。そこで2021年度はトリニダード・トバゴにあるUWIセント・オーガ

スティン校の言語学習センターにて日本語を学ぶ現地の学生を対象とし、January Sessionのオンライン授業に参加するための支援を行いました。

本年度は、日本のビジネスや経済メディア、現代文化や社会等をテーマとした4つの科目の中から各学生1つを選択し受講しました。今回のプログラム実施に際しては、「オンラインでの実施」、「授業は日本時間でのライブ配信」、「13時間もの時差」という課題があり、現地学生のモチベーションの維持が懸念されました。しかし、結果としては9名の学生が参加することとなり、全員がプログラムを無事修了することができました。参加者の中には駐トリニダード・トバゴ日本国大使館主催の日本語スピーチコンテストにて受賞歴がある学生もおり、現地での日本語教育に対する関心、そしてその関心を満たすプログラムの需要が高いことが確認されました。

## 参加した学生のうち2名からのコメントをご紹介します (APIC 翻訳)

- ① 宿題や課題の分量について教えてください。
- ② 印象に残っている授業やトピックについて教えてください。
- ③ プログラム全体を通して最も印象に残っていることについて教えてください。
- ④ プログラム期間中、大変だったことについて教えてください。
- ⑤ このプログラムに参加するにあたり、達成したかった目標はありましたか？
- ⑥ その目標を達成することはできましたか？
- ⑦ このプログラムはこれからの勉強や学生生活にどのような影響があると思いますか？

**チェルシー・ロックフォード** UWIでの専攻：情報工学・数学  
Chelsie Rochford 選択した科目：現代日本の文化と社会

- ① 講義自体はそこまで大変なものではありませんでしたが、自分の大学の授業との両立が少し難しかったです。
- ② 印象的だったのは「日本人の心理学」についての講義です。日本の多様な文化について様々な側面から見て学ぶことができましたし、自分自身に対する理解も深められたと思います。
- ③ 講義で使われたビデオが印象的でした。視覚学習に役立つうえに、面白く工夫されていました。
- ④ 最も大変だったのは、最終試験がこちらの時間で午前2時30分から4時頃までであったことです。
- ⑤ 主な目標は、日本の文化と社会についてより理解を深めるということでした。私の国の文化と比較して、どこが似ていてどこが似ていないのか、そしてどのように異なる伝統があるのかを学びたいと思いました。
- ⑥ 上記の目標は達成できたと思います。日本について大いに学び、あらゆる面において楽しみながら講義を受けることができました。知って驚くことがたくさんありました。
- ⑦ 日本の国や文化に対する興味関心をさらに深めることができました。日本を実際に訪問できる日が来るまで、日本語や日本に対する勉強を続けていきたいと思っています。

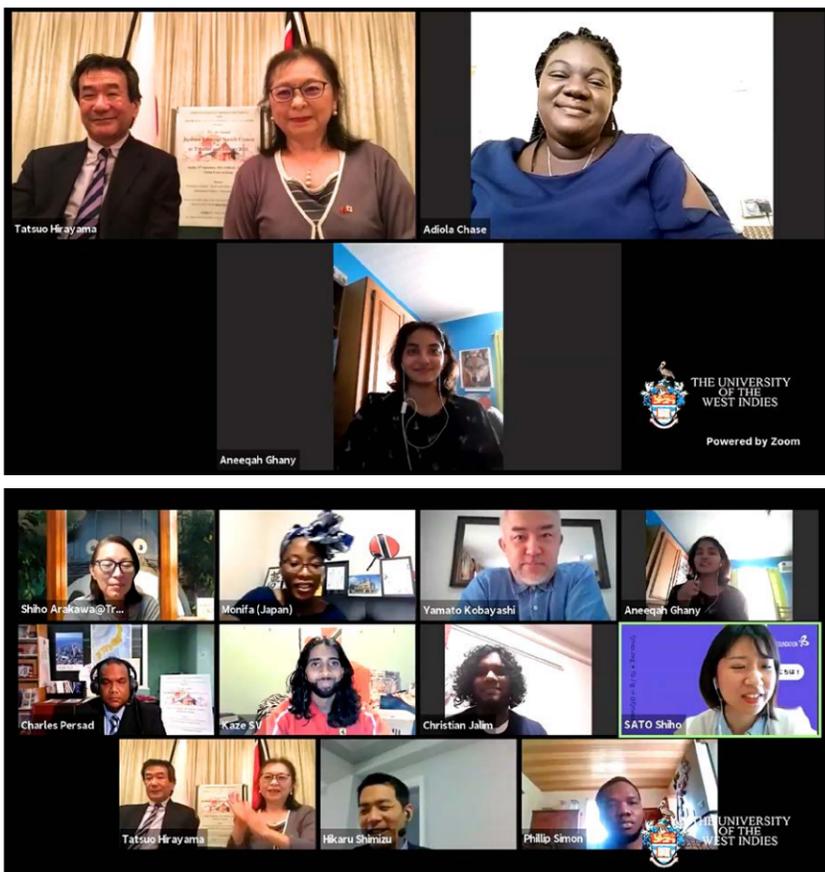
**スティーブ・ジョージ** UWIでの専攻：電気・コンピュータ工学  
Stephen Jogie 選択した科目：日本のビジネスと経済

- ① 全体としてそこまで多いという印象はありませんでした。期中にプレゼンテーション、期末にエッセイがありました。
- ② 特に印象に残っているのは1990年代の日本のバブル景気についての講義です。バブルが起きる現象や、バブル期の中での社会情勢はとても興味深く感じました。
- ③ 最もよかったと思うことは、日本の文化やビジネスだけでなく、クラスメイトたちからもそれぞれの国について学べたことです。バングラディッシュ、インドネシア、中国、韓国、メキシコからの学生がいて、それらの国について少しだけではありますが、非常に楽しく学ぶことができました。
- ④ このプログラムはとても充実していたと思います。唯一大変だったのは、通信回線等の技術的な部分で問題があったときでした。
- ⑤ 私の目標は日本のビジネスについて学び、日本の文化と言語について理解を深めることでした。また、この講義を受講した理由は直観的に面白そうだと感じたことと、日々の学生生活における良い変化になればと思ったからです。
- ⑥ 目標は達成することができました。日本のビジネスと経済について非常に楽しみながら学ぶことができ、日本の文化と言語に対する理解も深めることができました。
- ⑦ この講座に参加したことにより、日本語を勉強することの重要性を理解でき、モチベーションがさらに高まりました。また、オンラインとはいえども、世界中から集まったクラスメイトとともに勉強することにより、自分の視野を広げることができたと思います。

# トリニダード・トバゴでの日本語スピーチコンテスト支援

平山 駐トリニダード・トバゴ日本国大使と大使夫人(左上)、中級クラスで優勝したアディオラ・チェイスさん(右上)、初級クラスで優勝したタミカ・メイソンさん(下)

スピーチコンテストの参加者たち



2021年10月19日、在トリニダード・トバゴ日本国大使館およびUWIセント・オーガスティン校の言語学習センター(Center for Language Learning)の共催で、日本語スピーチコンテストが開催されました。APICは今回のコンテスト開催に際し、協賛という形で支援しました。本年度も昨年同様、新型コロナウイルスの影響によりオンラインでの開催となりましたが、参加した学生は堂々と目ごころの成果を披露し、大変活気のあるコンテストが執り行われました。

コンテストはElementary Level(初級)、Intermediate Level(中級もしくは日本在住経験ありの学生)に分かれて実施され、初級クラスには7名、中級クラスには2名、計9名の参加がありました。コンテスト参加者はそれぞれ3分から5分のスピーチを披露し、発音、文法、表現等の言語学的な視点だけでなく、発表中の表情やスピーチの内容までもが評価されました。

昨年続き、実際の会場での開催とはなりませんでしたが、コンテストのライブ配信には約100名の閲覧があり、現地での日本語に対する関心が高いことが確認されると同時に、日本語を学ぶ学生にとって貴重な発表の場となったよう

## 西インド諸島大学 University of the West Indies (UWI)

西インド諸島の17の国と地域で英語による高等教育を行う大学。4つのキャンパス(ジャマイカのモナ校、トリニダード・トバゴのセント・オーガスティン校、バルバドスのケイブヒル校、アンティグア・バーブーダのファイブアイランズ校)の他、通信制のオープンキャンパスが各地にあり、英語を公用語とするカリブ諸国における最古にして最大の高等教育機関として、様々な分野に人材を輩出している。

す。中でも、今回中級クラスで優勝したアディオラ・チェイス(Adiola Chase)さんはAPICが実施した「太平洋・カリブ学生招待計画」の招待学生として2018年に来日しており、帰国後も日本語の学習を継続していたとのこと。その努力もあり、今回優勝という輝かしい成績を収めることができました。また、同学生はJETプログラム(外国語青年招致事業)の英語教員として内定しており、コロナ禍が収束し、再び来日できるようになった際には日本の学校にて英語教育に携わるとのことでした。

本コンテスト開催のサポートができたことを大変光栄に思うとともに、APICの事業に参加した学生が継続的に日本語を勉強し、そして新たなステージへと進んでいく姿を見ることができ、事務局としても大変うれしく思います。

## カリブ公衆衛生庁へPCR検査キットの寄贈

日・カリコム友好協力基金を通じて、カリブ公衆衛生庁 (Caribbean Public Health Agency: CARPHA) に対し、カリコム加盟国における新型コロナウイルス感染症の拡大防止対策としてPCR検査キットが寄贈されました。

今般、カリコム事務局からの要請で過去に日本政府とAPICが日・カリコム友好協力基金を通じて支援した案件の残余金を活用し、カリコム加盟国の感染症対策のための検査キットを購入することになりました。今回の支援は、総額で30万米ドル相当で77,840回分のPCR検査キットを調達するもの(うちAPICの支援は約72,090回分)で、これらの検査キットはCARPHAが調達し、特に感染が拡がっているガイアナ、スリナム、ジャマイカを中心に、加盟各国に配布されます。

また、2021年10月5日にPCR検査キットの贈与式がCARPHAの本社(トリニダード・トバゴ)にて実

施され、平山達夫駐トリニダード・トバゴ日本国大使からセント・ジョンCARPHA長官へ引き渡されました。贈与式ではセント・ジョン長官より、コロナ禍における日本からの継続的な支援への感謝の意を表するとともに、感染症との戦いを続ける加盟各国への支援を今後も強化していく旨が述べられました。平山大使からは、この地域における感染対策において重要な役割を果たしているCARPHAに敬意を表するとともに、日本とカリコムの長年にわたる充実した関係性について言及し、今回の検査キットによってカリコム加盟国における検査体制が強化され、感染の早期発見に貢献できることを期待する旨が述べられました。この贈与式の模様と支援の内容について、カリコム諸国の新聞等で報道されました。

日本とカリコム加盟国の協力関係推進のため、APICは今後も支援を続けてまいります。



### INTERVIEW

西インド諸島大学 (UWI) 卒業生  
ボビー・スウクーさん

ボビー・スウクー (Bobby Sookoo) さんはトリニダード・トバゴ出身で、西インド諸島大学 (UWI) の卒業生です。2017年1月にAPICの「太平洋・カリブ学生招待計画」<sup>※1</sup>にて来日し、上智大学主催の短期プログラムに参加しました。UWI卒業後、文部科学省 (METI) 国費外国人留学生奨学金に合格し、2019年4月に筑波大学大学院に入學しました。現在、医療科学の修士課程に在籍しています。(インタビューはAPIC翻訳)

※1「太平洋・カリブ学生招待計画」とは、太平洋島嶼国及びカリブ諸国から大学生を日本へ招待し、約1カ月の滞在中、上智大学が主催する短期プログラム (Annual Session in Japanese Studies) に参加する計画。上智大学で開講される日本の文化、歴史、社会、経済や日本語に関する科目を受講するほか、日本の学生との交流や、国際協力観光、教育関連施設への視察などを行い、日本について学際的かつ実践的に学びを深める。

#### 短期プログラムに参加して

Q1. 2017年に短期プログラムで来日した際は約1カ月の滞在でしたが、当時の経験について、どのような印象だったか、それが勉学に対する姿勢や将来の目標にどのような影響があったか教えてください。

正直に言うと、最初にこのプログラムに参加できると知ったとき、何を期待したらいいのかわかりませんでした。日本に来られるということで大変興奮しました。実際

①平山大使の挨拶  
②平山大使(右)よりセント・ジョン長官(中央)へのPCR検査キットの引き渡し  
③寄贈された検査キット



に来日したときはとても楽しかったですし、大学など、何もかもが違うと感じました。しかしそれは予想できることで、良い意味での違いだと思いましたが、とても興味深かったです。他にも興味深かったのは、このプログラムでは日本人だけではなく様々な国からの学生と出会うことができたことです。これは予想していませんでした。ここまで多様な人々と交流できるとは思っていませんでした。これにも非常に魅力を感じました。たくさん異なる国からの学生が一堂に会し、一緒に学び、仲良くなる場所だと思いました。

上智大学での講義のほかに、日本の様々な場所を巡る機会がありました。実際に行ったのは東京周辺だけだったものの、とても良い機会でした。色々な場所を訪れ、日本料理を食べ、異文化を体験するなど、全てとても面白く、忘れられない経験となりました。プログラム修了後に帰国し、UWIでの勉強を再開した時は、大学最後の年でした。今後について考えているときに、短期プログラムに参加した経験がきっかけで、「日本に戻りたい」「日本でもっと長い時間を過ごしたい」と度々思うようになりました。それと同時に、ただ単に「日本にいたい」というわけではなく、勉強も続けたいと考えていました。これらの要因により、私は日本にいながら勉学を追求できる方法を探るようになりました。これが、日本で勉強する決断をするに至った最初の原動力の一つでした。

## 筑波大学院生として来日するまで

Q2. ボビーさんはUWIで生物学と微生物学を学んでいて、修士課程へ進むことを検討した際には色々な選択肢があったかと思いますが。その様々な可能性の中から、また日本に来て大学院に進学しようと決断した主な理由はなんですか？

先ほど申しあげたように、上智大学での短期プログラムは私の決断に大きな影響を与えました。しかし、プログラムに参加する前から、私は長いあいだ日本のことが



好きでした。例えば、日本のアニメ文化や音楽、社会そのもの、そして重要なのが学術研究分野で進んでいることです。教育や技術の発展など、優れた評価を得ています。自然災害に対する備えや、またそうした災害を克服していることについてもよく知られていて、とても興味があります。また、私は幼いころ、武術を習っていたことがありますが、具体的に言つと空手を習っていて、これは歴史を辿ると日本、特に沖縄の文化にたどり着きます。これもまた日本への関心を深めるきっかけとなりました。UWIを卒業したあとの選択肢について探していたとき、これらの要素と、私の一番の目標である「勉強する」ということ、そして上智大学での短期プログラムに参加したことによって、日本で勉強する方法を探ることになり、その中で、文部科学省(MEXT)の奨学金制度について知りました。そしてこれが日本で勉強しながら、日本の豊かな文化をさらに体験する機会を提供してくれると考えたのです。

Q3. 短期プログラムに参加する前から日本に興味があつて、色々なことを知っていたのですか。筑波大学でも空手は続いているのですか？

空手は私がこの大学で学ぶことになった際に楽しみにしていたことの一つでした。来日して6〜8カ月経ったころ、武芸を習うことができる施設を探して実際に試してみたのですが、残念ながら続けることは

難しい質問ですね。私の目標についてお話しします。私の目標は、さらに高度な教育を追求すること、そして正式な医学研究者になり、研究業界に貢献することです。それと、私はしばらくの間、アジア周辺で仕事がしたいと思っています。この地域から学ぶことはたくさんあると考えています。これは私が今の時点で主に目指していることです。

## 後輩へのメッセージ

Q8. APICの学生招待計画は引き続き実施を予定していて、それを通して多くの学生が上智大学の短期プログラム<sup>※2</sup>に参加しています。このプログラムへの参加を考えている学生や、既に参加済みで、修士号取得のため、もしくはJETプログラム<sup>※3</sup>に参加し教員として再度来日を考えている学生にメッセージやアドバイスがあれば教えてください。

実は、多くの人から同じような質問がたくさんありました。お答えするのが少し難しいのですが……まず、JETからお話ししましょう。私自身はJETの教員としての経験はありません。同級生や知り合いにこのプログラムに参加している人は多く、彼らから聞いた話でしか知りません。その話によると、JETの教員として来日すると、小学校から高校の生徒に英語を教えることが出来るそうです。彼らが教えるこ

できませんでした。というのも、研究を優先しなければならなかったからです。そのため、今はクラブや施設などのメンバーにはなっていないです。しかし昔の経験はまだ自分の中にあるので、いつか習うことができるようになったときに、忘れないように自分で練習を続けています。

Q4. 文部科学省の国費外国人留学生として採用されるためにどのような準備をしましたか？申請のための準備を全て終えるまにはどのくらい時間がかかりましたか？

大学最後の年に奨学金の申請を検討していたものの、申請に必要な準備のすべてについて詳しくは調べていませんでした。ですがGPAなど、必要な成績の基準については調べました。それらについて調べたあと、その基準に達するように勉強に集中しました。そして、卒業が近づいてきた頃、ついに奨学金に申請することを決断し、そのためには何が必要かを調べました。申請を通して、自分がこの奨学金を受給するのに相応しいか、文部科学省が求める人物像に沿って、期待に答えることができるか確かめました。その後、必要な書類やその他全てを準備しました。奨学金のために書類を準備するのは課題のように感じておらず、むしろ楽しみで、私の研究への情熱や、日本にいながら目標を達成したいという思いを表現するいい機会だと感じました。自分がやりたいことや、それらを成し遂げるために何故ここにいる必要があるかを示す

とや、それ以外のことでもたくさん冒険をしているのを見たり聞いたりして、とても楽しそうだと思います。日本に来てそのような経験がしたい人にとってはいいい選択肢だと思っています。

修士課程や研究については、これは私の意見ですが、どのような研究をしに来るかによって変わると思います。他にも同じ奨学金でこの大学へ、修士号やそれより上の学位取得のために来ている学生を知っています。彼らの分野は私のとは異なりま

質学などです。私の個人的な意見として、私と同じような分野、例えば医学や自然科学を研究しようとしている学生は、学業が最優先であることを意識すること強く勧めます。例えば私の場合、最初に期待していたほど多くの日本文化を経験できていないものの、そのうちのいくつかは経験することが出来ます。なので、日本に来て、日本の文化を体験したいと思っけていても、学生である限り学業が最優先であることは理解しておく必要があります。自分の研究分野における自分の立ち位置や、必要な作業量を知ること、将来的に日本文化の探求にどのくらいの時間を割り当てられるかなどを知ることが出来ます。このよう

チャンスだと思いました。これは私が奨学金の申請をするにあたって重点を置いていたことです。面接でも同じで、自分の情熱や、この奨学金に申請したい理由などについて説明できるように準備しました。

Q5. 準備は難しかったと感じましたか？それとも楽しんでいましたか？

結構面白かったです。文部科学省の奨学金は、主に二つの目的があつて、一つは研究、もう一つは日本文化との融合です。これらは不可欠です。ただ日本で研究がしたいというだけではいけないのです。私が研究計画書を書いているとき、色々な大学の教授について、どのような研究を行っているのかなど調査し、それらの分野に合わせ書きました。日本の中でも複数の地域を検討し、環境が研究に適しているか、暑すぎないか、寒すぎないかなどを調べ、行きたい大学を探しました。

## 来日してから

Q6. 予想外の困難や想定していたカルチャーショックもあつたことかと思いません。これまで、もしくはは今、どのような困難に直面していますか？そのような困難を乗り越えるために何か試しましたか？

これまでの2年間、研究室では結構トラブルがありました。私の研究室には外国人留学生が5、6人いて、日本人学生は1、2

Q9. 短期プログラムに参加したい学生へのメッセージはありますか？

全員参加するべきです。私自身もう一度参加できるのであればと思います。

※2 新型コロナウイルス感染症の影響により、2020年度及び2021年度の同プログラムはオンラインでの実施に変更となった。

※3 Japan Exchange and Teaching Programmeの略称であり、外務省、総務省、文部科学省(一財) 自治体国際化協会(クレア)の協力のもと、地方公共団体が、諸外国の若者を地方公務員等として任用し、日本全国の小学校、中学校や高校で外国語やスポーツなどを教えたり、地方公共団体で国際交流のために働いたりする機会を提供する事業。(外務省ホームページより)



筑波大学にて

Q7. 将来の夢や目標について教えてください。



埋まり、水は流れません。雨水が流れる予定の水なし川もゴミ捨て場になっています。また、ただでさえあるゴミにペットボトル、発泡スチロールの弁当箱がさらに状況を悪化させています。

ペットボトルやビニールパックの量はおびただしいものがあり、昨今海洋汚染とプラスチックゴミがクロージアップされていますが、そうした意味において無視できない環境汚染の問題に直結しています。公的な回収システムも細々とあるほか、ゴミ回収を実施する私企業もありますが、ゴミ処理場の整備自体がまだまだ不十分であり、全体としてなかなか改善されていません。現状では、収集したものはいいですが、出てしまったゴミがある以上背に腹は代えられないため、適宜溜まったところで街角や歩道上どこでも単純に火を付けて燃やしてしまうことが多いです。なお、当然分別はしていないので、家にいながらに漂ってくる煙のせいで喉をやられることもあります。

衛生的な生活環境を確保することはもちろんのこと、ハイチが目指す観光業の推進のためにも、その他の投資呼び込みのためにもゴミ処理の問題には早急に取り組む必要があると思われる。

である米国が大きなポテンシャルを有しているほか、カリコム諸国においてもニーズがあることから市場として有望と見られています。

■教育

次の世代のハイチを形作る原動力であるはずの教育についても大きな課題となつています。まず初等教育のレベルでも絶対的に学校(校舎)や先生の数が足りていない現状があります。幸い、親の子供に教育を受けさせたいという熱意は都市部・地方村落に関係なく存在することが感じられます。就学率自体は、都市部ではそれなりに改善してきており、8割を超えるようになっていきます。これに対して、地方村落部においては先の水くみ等の労働力にかり出されるケースや、インフラ自体の供給が足りていないこともあり、およそ50%を切っている状況にあります。また、必ずしも給食等の提供が確保できないため、昼で学校が終わってしまうこともあり、学校の利用率についても制約があります。狭い劣悪な環境であっても場所を共有したり入れ替え制をとったりしながら自助努力を続けており、公立学校の供給割合は低く留まり、あっても教師が十分でない場合等

■食料自給

ハイチでは、国土の多くが丘陵地帯ですが、平野部では米、ソルゴ(モロコシ)、トウモロコシ、バナナ、サトウキビ等が栽培され、山岳部においてもコーヒーやバナナ園があるほか、たな畑が整備され、また比較的高度が高いところでは野菜が栽培されています。また、畜産業・養鶏等も一定程度あります。それでもなお、効率の悪い小作農である等近代化の余地があること、また自然災害の襲来に脆弱であることもあり、食料自給率は50%を切っています。

商品作物は、伝統的にコーヒーがありましたが、過去に病害があつて大幅に収量が減少し、また、ハリケーンの下打撃を受ける等、恵まれない環境の下頑張っていると言えます。大変品質は良いのでカカオと共に輸出向けの作物として引き続き有望であると考えられますが、安定的な収量と品質管理などを確保する上でもさらに投資をする余地があるかも知れません。

バナナをはじめとした果物は昨今の世界的なオーガニック・ブームに乗って、大型のプランテーションの経営もなされています。輸出向けのオーガニック・バナナは現モイーズ大統領の得意

の逆境にも関わらず、教育に熱心な村やコミュニティでは父母やNGO等が資金を出し合つて、教会等の敷地を借りたりする等して、私立の学校を運営する例も少なからず見られます。また、教育を受ける側にとつても何かと資金がかかるのが教育です。学校に行く誇りにも直結するためか、幹線道路から1時間以上も奥にあるような地方村落に入つても学童らの制服が整つており、女子は可愛いリボンを着けたりもしています。

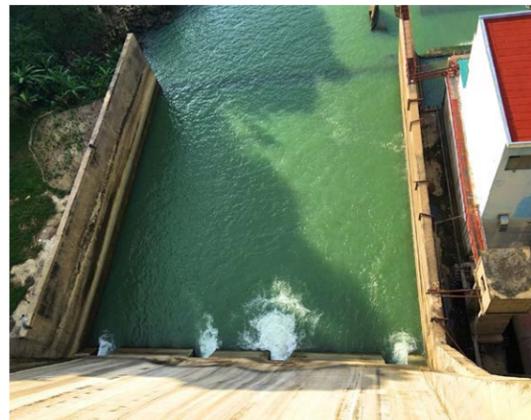
ただ、生活するのにも大変な生活水準からすれば、学校に行くために必要なものを一式そろえるのはかなり家計に厳しそうです。ハイチでは、9月の新学期前とクリスマス前が一般家庭における最も出費がかさむ月とされています。

ハイチでは、高等教育レベルでは、公立のハイチ国立大学のほかにも各県に大学がありそれぞれ制約はあるものの精力的に大学教育を推進しています。また、名門のキスケヤ大学をはじめとする私立の大学も様々なものがあり、高等教育を支えています。

なお、良い高校や職業訓練等の専門学校、養護学校やインフォーマル教育等の面においてもまだ大きく課題が残っています。



ペリゴールのダム



ペリゴールダムと発電設備



ゴミで埋もれて機能が低下してしまった側溝



カルフルのゴミ集積場 適宜火をつけて燃やしている

分野です。また、多くのマンゴーが米国等へ輸出されているとのこと。ハイチの食料・農業政策は、大きく、先ず国内における自給率を上げ、国際

■医療事情

ハイチにおける医療事情は複雑です。高額とは言え富裕層がかかれるような手術室・集中治療室のあるような病院や一定の設備と医者のいる私立のクリニックもあれば、ほとんど医療サービスらしきものが届いていない地方都市まで大きな格差があります。また、都市部では、医療保険制度もありますが、保険対象の場合であっても内容が限られており、取り扱い指定病院が限定されている等なかなか満足な水準ではなさそうです。

保健医療面では、およそ他の発展途上国でも見られるような課題は多く見られます。さらに、幹線道路を除く道路の整備の問題や、丘陵地帯であったりすることから、四輪駆動車でなければアクセスできないコミュニティが多く、多くの救急車も四輪駆動車となり、救急車の配備自体もままなりません。地方では特に県単位等において上位総合病院の整備と位置づけも不完全な場合が多く、レファレル機能・組織が物理的にも組織的にも機能していないことがあります。これらの不足分は個人やコミュニティが自助努力で必死にカバーすることになりますが、それらも限界があります。

慢性的に国家財政自体の問題もあり、大口の保険分野については国家予算の割り当て自体が極めて不足しており、2017年度は予算の43%しかなく、これでは通常の病院を維持・運営することすらままなりません。新規に保健所を開所するどころか、古くなったインフラや医療機器を刷新することもほぼ困難と思えます。

保健分野はそうしたことと背中合わせで、多くの支援国、NGO等が支援を展開している分野でもありますが、持続的なサービス提供と質の向上のためには、国家予算の割り当てを含めてより一層の資金の確保が重要と思われる(2018~2019年度の予算案では7%超が計上されており、これが承認されれば良い方向性であると言えます)。予算不足は給与不足でもあり、関連する従事者がゼネストをして医療サービスが止まってしまい問題になったこともあります。安定した医療サービスの提供に向けて一層の努力が払われることが望まれます。

(※写真は筆者が撮影)  
(※本コラムの内容は、筆者の個人的見解であり、所属する機関の公式見解ではありません。)

🎓 ザビエル留学生

「ザビエル留学生奨学金」は2014年に始まった奨学金制度で、ミクロネシア連邦チューク州にあるザビエル高校・上智大学・APICの三者間の合意に基づき、ザビエル高校から上智大学への留学生を支援するプログラムです。これまでに8名の学生が本奨学金制度によって上智大学に入学し、4名が卒業しました。

🎓 APIC-MCT 留学生

「APIC-MCT 留学生奨学金制度」は、上智大学・ミクロネシア自然保護基金 (Micronesia Conservation Trust : MCT) ・APICの三者間の合意に基づき、ミクロネシア3カ国からの留学生を受け入れ、上智大学大学院地球環境学研究所での修士号取得を支援するプログラムです。2017年のプログラム開始以降、これまで9名の大学院生が入学し、5名が卒業しました。現在4名の学生がそれぞれの研究テーマを持ちながら日々、研究に打ち込んでいます。



オンライン交流会

2021年7月12日、島根県海士町にある隠岐島前高校の生徒と、上智大学に通うザビエル留学生とのオンライン交流会が実施されました。隠岐島前高校では「グローバル探究」として生徒が様々な海外諸国と交流する取り組みを行っており、各生徒が自分の探究テーマを持ち、海外研修などを通してテーマについての学びを深めています。今回、交流を行った生徒たちは「離島における地域医療」というテーマに取り組みんでおり、沖縄の離島やミクロネシア連邦における医療に関してインタビューや比較をしているということで、ミクロネシアからの留学生たちの声を聴くという目的で、オンライン上で交流・意見交換をしました。今回インタビューを行った生徒たちは医療系の学部への進学を考えていると、これで、90分のインタビュー時間では足りないくらいに現地の人や文化について深く話すことができました。

- ご寄付のお願い**
- 対象** ザビエル高校卒業生 毎年1~2名
  - 留学先** 上智大学国際教養学部 / 理工学部英語コース / Sophia Program for Sustainable Futures (SPSF)
  - 奨学金** 卒業までの4年間の奨学金を授与
  - 振込先** 三菱UFJ銀行 本店(店番001) 普通口座 1660339  
口座名: 一般財団法人 国際協力推進協会 奨学金募金  
カナ名: ザイ) コクサイ キョウリヨク スイシン キョウカイ  
※振込手数料はご負担をお願いしております。

留学生を中・長期的に受け入れるためには、それにかかわる渡航費、入学金、授業料、生活費等とかなりの額にのぼることが見込まれます。皆様からのご協力をお願い申し上げます。

ご寄付のお願い

「ザビエル高校留学生奨学金制度」は、上智大学の留学生基金の他、皆様のAPICへのご寄付により、2021年12月現在、総額約9,058万円を預かりいたしました。皆様のおかげで、留学生たちは上智大学で充実した生活を送っています。皆様に御礼申し上げますとともに、本留学生奨学金制度への更なるご支援をお願いいたします。

卒業

第2期 APIC-MCT 留学生

ラジキット・ルフス さん  
Lajkit Rufus

上智大学大学院で約2年間学んでいたラジキット・ルフスさんが2021年3月に卒業しました。

上智大学(大学院)に入学したことは私にとって素晴らしい選択でした。環境保全や持続性について、教授の方から非常に多くのことを学べたからです。上智で環境学を専攻し、学問を追求することが、私と私の母国にとって有益で価値のあることだと勉強を通じて気付かされました。困難に直面することもありました。全てにおいてよい未来を築くために、それらの困難に立ち向かうこともいとわなかったです。それには大変な努力や決断、モチベーションを要しましたが、失敗を乗り越えられると確信するために全力を注ぎました。「行動は言葉よりも雄弁だ」と知ったあとは、もっと知識を得るとして自分の役割を果たし、将来、母国に貢献できるよう準備をしました(上智大学のおかげです)。

日本での生活は素晴らしかったです。日本の文化に触れ、人々がお互いに敬意を持って接していることについてた

卒業

第4期ザビエル留学生

ショーン・ミンギー さん  
Shaun Mingji

上智大学で4年間学んでいたショーン・ミンギーさんが2021年9月に卒業しました。

荷物は何? OK. チケットは何? OK. パスポートは何? OK. 日本へ向かう初めての飛行機に乗るための準備はそれくらい簡単でした。朝起きて空港に向かうだけのことでした。しかし、わくわくする一方で、とても緊張していました。ミクロネシアで全寮制の学校に通い、家族と離れて生活したことはありませんが、日本で暮らすことは全く異なるものでした。街並みは私の故郷とは全く違いますし、都会での暮らしに慣れる必要がありました。あの飛行機に乗り込むことで私の人生が一変するのわかっていました。幸い、東京での生活にはすぐに慣れ、一生忘れないような素敵な経験をたくさんしました。

東京に到着した翌週は、区役所で書類に記入したり、携帯電話の契約をしたり、銀行口座を開いたり、やるべきことがたくさんありました。幸い、私より前に来日していたミクロネシアの学生たちに手伝ってもらったので、生活が落ち着くまでの過程には、私が当初思っていたほどの負担はありませんでした。数週間後には大学の授業が始まりましたが、とても興味深く、楽しかったです。全てが順調に進んでいました。私が唯一嫌だと思ったのはラッ



海士町での研修にて

シユの時間帯の満員電車、これには4年間耐え続けなければなりません。学生生活の4年間では、他にも多くの経験をしました。それらは全て私が人として成長することに役立ちました。例えば、最初の頃は日本語が上手く話せず、普段は話さないような間違いをたくさんしました。コンビニやレストランなどで、日本語能力が低いためにも間違えてしまうことはありました。間違いをしたあと、いつも恥ずかしくなるのですが、たくさん間違いをした後は間違えることが怖くなくなりました。その代わり、常に自分自身を改善しようと試みました。他にも価値のある経験をしました。例えば、Ignatian Student Leadership Forum (ISLF) にボランティアとして参加し、世界中のイエズス会系高校に通う生徒と交流しました。これにより、リーダーシップスキルを磨くことが出来ました。APICと協力企業との連携で実現したお祭りや文化交流イベントに参加する機会もありました。APICが企画したこれらのイベントは、絶対に忘れない最も素晴らしい経験の一つです。皆様のおかげでこれらの経験をすることができて、心から感謝しています。

私の目標は、環境保全に関心があったので、私たちの生態系への脅威となるものを特定し、防ぎ、そして軽減するために貢献したいということでした。上智大学大学院地球環境学研究所ではこれらのスキルを身に付けて、私のコミュニティや国、政策決定者に対して環境保全についてうまく説明できるようにになりました。農林コーディネーターとして、私のコミュニティに、自分たちの土地をもっと環境に優しい方法で保護し、私たちが何年ものあいだ行っている伝統的な方法での植林を促進しました。他にも、マール諸島の食料および栄養の安全保障を促進するためのいくつかのプロジェクトにも参加しています。



ラジキットさん(一番右)

卒業

第3期 APIC-MCT 留学生

エルウン・ヒデオス さん  
Elchung Hideyos

上智大学大学院で2年間学んで  
いたエルウン・ヒデオスさんが  
2021年9月に卒業しました。

Al: (こんにちは)！私の名前はエルウン・ヒデオスです。日本で過ごした時間はとても充実していました。同時に短い期間でした。私が高校生だった頃は、日本の学校に通えたらどんなに素晴らしいことだろうかといつも夢見ていました。まさか本当に実現するとは思っていませんでした。2019年9月に初めて来日したときは、とてもわくわく



して、大学院の授業が始まる。だんだん緊張感が増していき、それが最後になると思いませんでした。2020年3月に日本でCOVID-19パンデミックが起こったのは、ちょうど大学の校外学習で行っていたコロナから帰ってきたときでした。コロナから帰ってきた直後、寮の中で自己隔離をするように言われ、翌学期以降の授業や大学関連のイベントはオンラインでの実施に変更されました。このパンデミックは私にたくさんを教えてくれました。精神面や感情面において健康でいることは、身体的に健康であることと同じように重要であり、このような試練の時期には特にそう言える、ということ。振り返ると、苦しい思いをすることも多かったですが、自粛中に一人いるときも大変なことがたくさんありました。しかし、指導教員や上智大学の友人たち、そしてパラオから私を応援してくれている家族がサポートしてくれました。あと、もつと大学関連のイベントに参加したり、日本を旅したりする時間が欲しかったなと思います。私が日本で過ごした時間は、ほとんど寮の部屋に籠っていましたが、視野を広げてくれて、謙虚な気持ち

にしてくれました。全てをやり通し、終わらせることができ、自分自身をとても誇りに思います。大学院の授業からも(対面でもオンラインでも)、「旅」の途中で出会った多くの人々からも非常に多くのことを学びました。APIC、上智大学、MCTによって提供され、ミクロネシアの大学院生に環境学の修士号を追求するこの機会を得られたことに、一生感謝します。

ミクロネシア各地の新聞に、卒業についての記事が掲載されました。画像はThe Kaselehlie Press (2021年11月17~30日付)



入学

第5期 APIC-MCT 留学生

タラ・アーノルド さん  
Tara Arnold

2021年9月、タラ・アーノルドさんが上智大学大学院に入学しました。



私の名前はタラ・アーノルドです。ミクロネシア連邦(FSM)という、4つの州からなる小さな国から来ました。刑事司法学の学士号を取得して卒業しました。この奨学金制度については、私と同じくAPICの奨学金の受給者である友人が教えてくれて、知りませんでした。この奨学金制度は毎年、選考で合格した2名の学生に、東京にある上智大学大学院の地球環境学研究所にて修士号取得の機会を提供してくれています。私は自分が選ばれ、研究を進めることができ、運が良いと思っています。私は、選考のインタビューにおいて、一度、「あなたが提出した過去に書いたペーパーは『児童虐待』についてであり、環境と関係ないが、応募の動機は何ですか。このプログラムでは地球環境学について学ぶことになっているのを知っていますか。」と聞かれたことがあります。私の答えは「気候変動に対処するための活動の一員になり、母国FSMに知識を持ち帰るため」でした。

私の大学院生活における今後の2年間では、日本に入学し、授業に出席できたらと考えています。現在は日本に入学することが難しいため、上智大学のオンライン授業を受けざるをえない多くの学生にとって、こうした環境は本当に大変であったと思います。時差の問題や、ほとんど誰とも連絡できず質問ができなかったこともあるでしょう。私は、知識や経験を広げるためには、自分が日本にいないだけでなく、様々な活動に参加することが重要だと考えています。授業や課外活動に参加しながら、日本の言語や文化についても学びたいです。人は、自分の「安全地帯」から出なければ、知識を広げることができません。特にワールドワーカーなど、全てを2年間で終わらせるには難しいこともあると思います。ですが、それが終わったときには、全てそれだけの価値があるのだと感じるでしょう。何故なら、「課題が厳しいほど、成長も大きい」からです。

入学

第5期 APIC-MCT 留学生

ナターシャ・ゴロン さん  
Natasha Gorong

2021年9月、ナターシャ・ゴロンさんが上智大学大学院に入学しました。



私の名前はナターシャ・ゴロンで、ミクロネシア連邦ヤップ州出身です。地球環境学研究所の1年生です。APICのことやMCTとの連携については、私が大学3年生のとき、申し込みができそうな大学院を探していた際に知りました。私の母国における環境問題についての研究論文を書くチャンスが得られると思い、非常に興味をそそられました。この奨学金制度の候補生として選ばれたと知ったときは、とても達成感がありました。一方、自分が学び続けられ、そして視野を広げられるのだというところで、身の引き締まる思いでした。大学院生になり、別の国へ行くことは実に楽しいことです。大学生活を始めた時と似ています。新しい環境に入り、新しい仲間と出会うことをとても楽しみにしていました。残念ながら世界的なパンデミックにより、違う意味で全く新しい経験をするようになりました。修士課程をオンラインで始め

ることになるとは想像すらしていませんでした。アメリカから出る事ができず、授業の時間は午後9時55分から朝までで、日常生活を送りながら授業を受けるといことはとても大変です。しかしながら、この奨学金に合格し、上智大学の最も聡明で、それでいて謙虚な教授や専門家から学ぶ機会を得られたことに本当に感謝しています。先生方は私の困難や課題をかえって楽しめるものにしてきて、深夜におよぶ授業でも全力で取り組む価値があると感じられます。渡航状況はまだ不明瞭ですが、キャンパスでの対面授業が再開され、オンライン上ではかえなかつた方々と実際に顔を合わせる事ができる日を辛抱強く待ち望んでいます。他の多くの奨学金プログラムでも、留学生が日本に入学できる方法を模索しているようですが、APICのプログラムにおいても私たちが支援して頂けると思っております。

上智大学では、2021年春学期以降、万全の感染防止対策を講じながら、対面での授業が再開されました。その後も感染状況に応じてオンラインを中心とした授業形態に切り替えるなどの対応が取られています。



APIC事務所にて  
左から、APIC-MCT留学生のアネットさんとエルウンさん、ザビエル留学生のポールさんとショーンさん

# トリニダード・トバゴとの 関係拡大の潜在力あり

寄稿：平山 達夫 駐トリニダード・トバゴ大使

新型コロナウイルス感染症の世界的流行により、APICにおいても島嶼国との交流事業の停止が余儀なくされています。そうした中でも国際交流の推進のため、この度、各任地で日夜ご苦心されている大使の任国事情についてのお便りをいただくことになりました。今回は平山達夫 駐トリニダード・トバゴ大使に、大使の任国事情についてのご意見を様々な観点からお聞きし、ご紹介いたします。

## 1. トリニダード・トバゴと兼轄8カ国

トリニダード・トバゴは、カリブ海の南東の端に位置し、ベネズエラとは目と鼻の先にあり、石油と天然ガス資源で発展してきた国である。観光依存が高い他のカリブ諸国とは趣を異にする。

当館は、当国に加え、東カリブ6カ国とガイアナ及びスリナムの計9カ国を担当している。9カ国の人口を合わせても300万人強であるが、独立国家として国連で9票を持つ。また、カリブ14カ国はカリコム（カリブ共同体）を設立し、地域統合を進めており、その事務局はガイアナにあり、当館の担当となっている。当地着任後、1年近くかけて9カ国全部に信任状捧呈を済ませることができた。

## 2. トリニダード・トバゴと日本

両国は、1964年に外交関係を樹立し、79年に在トリニダード・トバゴ日本大使館が開設され、長い友好関係を有している。2014年には、安倍総理（当時）が日本の総理として初めて当国を訪問し、日カリコム首脳会合が開催された。本年7月20日には、ジャマイカ訪問中の茂木外務大臣とカリコム外相との間で、

第7回日カリコム外相会合がオンラインで開催され、日カリコム関係、地域情勢等が協議された。

当国経済は、石油ガス産業を基盤としているが、石油ガス価格の低下、生産低迷により、厳しい状況にある。そこにコロナ禍による支出が増え、財政赤字は増加している。そのような状況で、三菱3社（三菱ガス化学、三菱商事、三菱重工）が参画し、カリビアンガス化学（CGCL）のメタノール製造プラントが完成し、20年12月に生産を開始した。これは総額10億米ドルの大規模プロジェクトで、日本の当国への最大投資案件である。

当地では日本車を初め日本製品一般に人気は高いが、日本文化への関心も高まっている。日本とは1万4千キロ近く離れているが、インターネットの普及等で日本を身近に感じることができている。アニメ等の人気は高いし、日本食も増えており、カリブ風ではあるが、寿司も人気メニューとなっている。

日本への関心や交流は以前から行われており、西インド諸島大学での日本語教育、JETプログラム等によって長年支えられてきた。西インド諸島大学語学学習センターでは20年以上にわたり、1,700人以上の学生に日本語を教えて

きた。JETプログラムは、15年以上も当国で実施され、今まで170人弱が参加している。JET帰国参加者は、JET同窓会を形成し、日本での体験を当地で伝え、両国の架け橋となる活躍を見せている。

2020東京オリンピックのホストタウンとして鹿児島県大崎町と高知県中土佐町との交流が既に開始されている。コロナ禍の影響はあるが、オリンピック後も交流が続くことが望まれる。

## 3. コロナ禍の影響とコロナ後へ向けて

当国の国境は、20年3月に閉鎖され、1年4カ月経って7月17日ようやく再開された。国内でも、外出規制、経済活動規制が実施され、当館の活動も大きな影響を受けている。以前は日常茶飯事であった会議や行事は殆ど開催出来なくなかった。当国の国民的祭りであるカーニバルも今年は中止となり、当館も2月の天皇誕生日祝賀レセプションの開催を断念し、当国外務大臣の祝賀メッセージ等の記念ビデオをYouTubeで配信した。

また、国境閉鎖に伴い、毎月数度行っていた兼轄国への出張が途絶えた。20年

には多くの国で総選挙が実施され、ガイアナとスリナムでは政権交代があったが、新政権との対面会談は出来ていない。更に、招へい事業が軒並み延期され、昨年度発予定であったJET参加者、各種招へいや研修事業は延期となったのは残念である。

この状況下で、誰もが何ができるのか悪戦苦闘している。1つには、規制を遵守し、対面での行事を行うことで、要人との会談、叙勲や外務大臣表彰の授与式、懇談会を小規模で実施している。JET同窓会を対象に実施した手打ちうどん実演は好評だった。もう1つは、オンラインの活用であり、大人数の会合、兼轄国との行事などはオンライン対応となる。昨年の日本語弁論大会やJET関連会合等もオンライン化され、どこからでもアクセス可能という利点もあった。

ワクチン接種が普及し、国内規制や国際渡航が緩和されても、以前の状態に完全に戻することは難しいが、現地に行き、顔を合わせることの重要性が消える訳ではない。オンライン方式に利点もあるので、その双方の利点、強みを組み合わせ、効果的な活動を実施することが必要となる。



ブラウン外務大臣との夕食会（21年3月）



天皇誕生日祝賀レセプション(20年2月。トゥーサン外務次官との乾杯)



JET同窓会委員との懇談（21年4月。手打ちうどん実演）



ポートオブスペイン市遠景



上智大学学長一行の当地訪問（西インド諸島大学との会議）(19年8月)



カリビアンガス化学（CGCL）訪問

# APIC 早朝国際情勢講演会



毎月1回（8月以外）開催されるAPIC早朝国際情勢講演会では、外務省幹部、在外大使などを講師としてお迎えし、時局の外交課題や激動する国際情勢などについて講演が行われます。現職の外務事務次官や外務省局長、一時帰国中や退官直後の大使から、いま実際に進行中の国際情勢のテーマについて質の高い話を聞くことができる機会として、参加者からの評価は極めて高いものがあります。

本年は新型コロナウイルス感染症拡大による緊急事態宣言を受け、1月～3月の講演会は開催中止となりましたが、4月に再開し、5月にはオンラインでの配信も開始しました。その後も感染状況を鑑みつつ、オンライン配信のみもしくは会場・オンライン同時配信に切り替えながら開催しております。なお、講演会当日は入館時の検温、手指消毒、飲食時を除きマスク着用、三密回避と身体的距離を取った着席とし、講師席には飛沫感染防止の亚克力板を設置するなど、感染防止のための万全の措置を講じています。

本講演は、APIC維持会員の皆様には自動的にご案内するほか、非会員で参加をご希望の方にもご案内を行っております。詳細につきましては、本誌裏表紙に記載しているAPIC事務局の連絡先にご照会ください。

## APIC 役員名簿 (2022年1月1日現在)

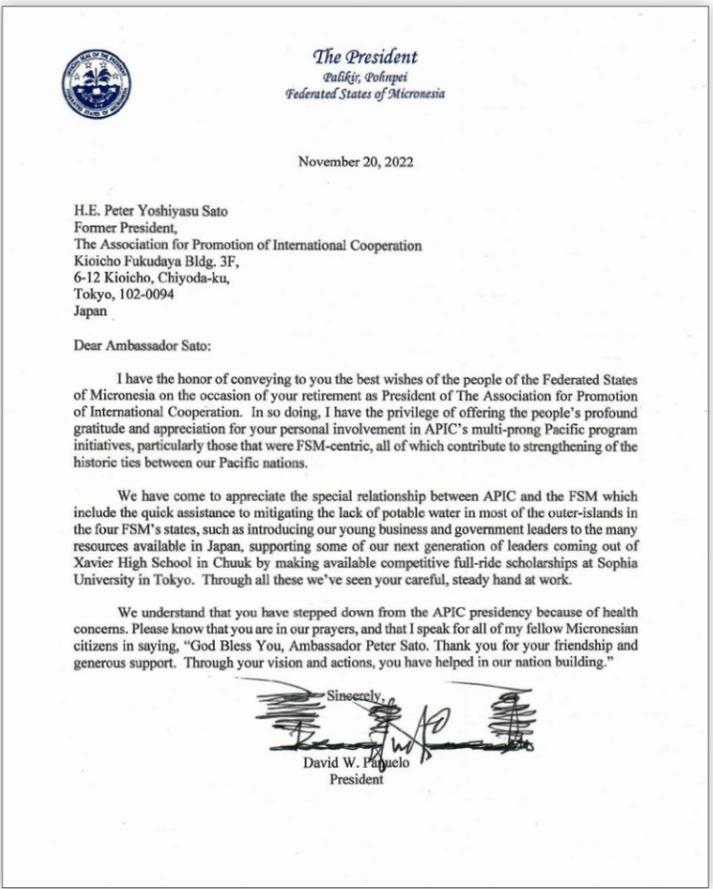
### ◆ 役員

理事長	重家 俊範	(最終官職：外務省 駐大韓民国特命全権大使)
常務理事	佐藤 昭治	(最終官職：外務省 駐ミクロネシア日本国特命全権大使 (兼パラオ・マーシャル諸島))
理事	荒木 恵	一般財団法人国際協力推進協会 (APIC) 事務局長 (最終官職：財務省 国際局付派遣職員 (アジア開発銀行職員))
理事	今野 秀洋	一般財団法人貿易・産業協力振興財団 理事長 (最終官職：経済産業審議官)
理事	鳥飼 玖美子	一般財団法人港区国際交流協会 理事長
理事	村上 洋	上智大学 客員教授
理事	山本 達也	エーオンジャパン株式会社 代表取締役社長
監事	金成 憲道	元ドイツ証券株式会社 取締役会長
監事	吉川 英一	株式会社三菱UFJ銀行 顧問

### ◆ 評議員

評議員	石堂 一成	東京コンサルティング株式会社 代表取締役社長
評議員	坂本 吉弘	一般財団法人安全保障貿易情報センター 理事長 (最終官職：通商産業審議官)
評議員	炭谷 茂	社会福祉法人恩賜財団済生会 理事長 (最終官職：環境省 事務次官)
評議員	島内 憲	元駐ブラジル連邦共和国特命全権大使
評議員	高原 明生	JICA 緒方貞子平和開発研究所 研究所長
評議員	廣野 良吉	成蹊大学 名誉教授
評議員	舟木 いさ子	ヤクモ株式会社 取締役
評議員	本多 義人	東神インターナショナル株式会社 名誉会長

# ミクロネシア連邦パニュエロ大統領からAPIC佐藤嘉恭前理事長に感謝の書簡



パニュエロ・ミクロネシア大統領発佐藤前理事長宛書簡

佐藤嘉恭前理事長の国際協力推進協会理事長退任にあたり、ミクロネシア連邦のパニュエロ大統領から外交ルートを通じて、11月20日付書簡により感謝のメッセージが届けられました。

APICの活動が、これまで協力を果たしてきた国の元首から高い評価を受けている一例としてご紹介します。

同書簡の中で、パニュエロ大統領は、「日本と太平洋島嶼国との歴史的な関係を一層強固するいろいろな分野でのAPICの活動について、貴理事長が果たされた尽力に對して、ミクロネシア国民の深甚な感謝をお伝えすることは自分にとってたいへん光栄に感じるところです」と述べています。

さらに、同大統領は、具体的に、次のよ

- ① カビンガマランギ島などの離島における給水タンクの供与、
  - ② ミクロネシア3カ国若手リーダー招聘計画によるミクロネシア政府関係者・ビジネス関係者の日本への招待、
  - ③ ザビエル高校卒業生を対象としたAPIC・上智大学の「ザビエル高校留学生奨学金制度」による次世代のリーダーの育成。
- 最後に、パニュエロ大統領は、ミクロネシア国民を代表して、「佐藤嘉恭大使、あなたが示された友情と寛大な支援に感謝します。あなたのビジョンと行動は、ミクロネシアの国家建設にたいへん貢献されました」と書簡を結んでいます。
- このほかに、佐藤嘉恭前理事長にはミクロネシア連邦のモリ元大統領、マーシャル諸島共和国のハイネ前大統領からも深甚な謝意表明の書簡が接しています。



「太平洋諸国若手リーダー招聘計画」(2016年2月実施)に参加していた際のパニュエロ大統領。左：APIC 佐藤前理事長主催夕食会にて/右：日本・太平洋島嶼国友好議員連盟との懇談会にて

2021年9月6日に実施された理事会において、令和二年度(2020年7月1日から2021年6月30日まで)の「事業報告書」及び「決算報告書」が次のとおり承認されました。

※本誌では簡略版を掲載しています。詳細につきましてはAPICホームページをご覧ください。

1. 太平洋島嶼国開発協力事業

(1) 太平洋諸国・大学生招待計画【延期】  
毎年1月に太平洋諸国から複数名の大学生を招待し、上智大学の短期プログラム(January Session in Japanese Study)に参加。APICによる文化交流活動事業などを実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の世界的な蔓延による渡航制限の影響で、招待が不可能となったため今年度は中止となった。  
本事業は、日・カリブ友好協力事業の西インド諸島大学学生招待計画と趣旨が同じであることから、一体の事業として実施しており、異なる地域の学生が一堂に会して学び、共に生活し、意見交換を図ることができるシナジー効果もあり、参加者からは貴重な経験ができたという評価を得ている。また、これまでの参加者のうち3人が日本の大学院(上智大、東工大、筑波大)に留学中で、1名がJETプログラムにより昨年9月から熊本県の高校で英語を教えているなど、大学関係者のみならず現地の議員や大使館からも日本との友好関係に大きく貢献する事業であると高い評価を得ている。

(2) 太平洋諸国・記者招待計画【延期】  
毎年10月頃に公益財団法人フォーリン・プレスセンターの協力を得て実施している。太平洋の記者2名程

のキャンパスツアーを実施するほか、上智福岡高校及び隠岐島前高校を訪問させて、若い世代間で絆の醸成を図る。約一週間の滞在中、招待生徒は日本を多角的な視点からとらえ、日本文化や伝統、歴史に対する理解を深めることを計画していたが、新型コロナウイルス感染症の影響による渡航制限のため、実現出来なかった。

(13) サモア観光開発支援(国家元首及び同夫人共著の回顧録(サモア現代史)を通じた観光啓発資料の出版事業)【予備費・実施】  
駐サモア寺澤元一大使を通じて支援要請があった案件。インバウンド観光産業に大きく依存するサモア独立国に対する経済社会や独立後の同国の現代史に関する海外における理解増進は、同国に対する関心を発揚し、ひいては、同国の現代史探訪の観光の開発に寄与する。同国の観光産業促進のための海外の同国に対する理解増進を目的として、同国の現代史を叙述する同国家元首(サモア四大酋長家の出身。国選弁護人、最高裁法廷弁護士、管財人等歴任)の本件回顧録の出版同国家元首の回顧録の出版を支援するもの。同国の発展史を辿る歴史遺産の探訪観光は、同国の持続可能な観光産業の促進に寄与する。回顧録の出版の意義が認められるため、その企画を支援する観点から出版に必要な経費\$28,000の一部(\$10,000)を支援した。

2. 日・カリブ友好協力事業

(1) 西インド諸島大学・大学生招待計画【延期】

毎年1月に西インド諸島大学(UWI)の学生を太平洋諸国の大学生と同時に招待しているが、太平洋事業同様、新型コロナウイルス感染症の影響による渡航制限のため、招待が不可能となったため今年度は中止とした。(内容は、太平洋事業(1)参照。)本年度のJanuary Sessionが全面的にオンラインで実施されることとなったため招待は中止としたが、トリニダード・トバゴの学生がオンラインでの参加を希望しており、駐トリニダード・トバゴ平山大使から検討要請があったことから、本プログラムを提供することになった。西インド諸島大学言語学習センターに推薦を依頼し、日本語を学習している学生、及び日本に対する興味関心を持ち学習意欲の高い学生を中心に募集を行った結果、9名が参加した。

度を招待し、カリブ諸国・記者招待計画と一体の事業として実施している。本計画は有力記者を招待して、我が国の環境保護、防災、エネルギー利用などについて理解を深めてもらい、もって我が国の現状についての広報をそれぞれの国で行ってもらうものである。本年度は、新型コロナウイルス感染症の影響による渡航制限の影響で、招待が不可能となったため今年度は中止となった。

(3) 太平洋諸国・リーダー招待計画【延期】  
本年度は、新型コロナウイルス感染症の影響による渡航制限のため、実現出来なかった。

(4) 太平洋青年研修【延期】  
サモアより、将来を担う若手の実務者を我が国に招待し、島根県海士町にて研修を行うこととして人選と研修内容について在サモア大使館・海士町側と調整を図っていたが、昨年度に続き、新型コロナウイルス感染症による影響で本年度の実施も断念することになった。

(5) 太平洋諸国・環境セミナー【延期】

本事業は、2015年7月に上智大学と共催で「太平洋地域における環境保全シンポジウム」を開催して以来、環境セミナー・シリーズとしてパオ(2015年8月)、ジャマイカ(2016年10月)、マーシャル諸島(2017年3月)、バルバドス(2017年9月)、ミクロネシア連邦ポニー(2018年3月)、トリニダード・トバゴ(2018年9月)、サモア独立国(2019年3月)と各地で開催してきたものである。今回はミクロネシア連邦チューク州で実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響による渡航制限のため、昨年度に続き、本年度も実施を見送ることとなった。

(6) APIC・MCT協力事業(ミクロネシア連邦水タンク設置等)【実施】

今年度はミクロネシア自然保護基金(Micronesia Conservation Trust:以下MCT)を通じてミクロネシア連邦チューク州への貯水タンク敷設事業を予定していたが、ミクロネシアの干ばつの状況が深刻であることからMCTより同様の追加要請があり、下記3件の支援を実施した。

(2) カリブ諸国・記者招待計画【延期】

毎年10月頃に公益財団法人フォーリン・プレスセンターの協力を得て実施している。カリブの記者2名程度を招待し太平洋諸国・記者招待計画と一体の事業として実施している。人選も終わっているが、新型コロナウイルス感染症の影響による渡航制限のため、招待が不可能となったため今年度に延期となった。内容は、太平洋事業(2)参照。

(3) カリブ諸国・リーダー招待計画【延期】

本年度も、新型コロナウイルスの影響による渡航制限のため、実現出来なかった。

(4) 西インド諸島大学・副総長・学長招待計画【延期】

平成28年度にケープヒル校(バルバドス)学長、平成29年度にセント・オーガスティン校(トリニダード・トバゴ)学長の招待計画が実現しているが、今年度も、繰り越しとなっていたUWIの副総長およびモナ校(ジャマイカ)学長の招待を計画していたが、新型コロナウイルス感染症の影響による渡航制限のため、実現出来なかった。

(5) 上智大学地球環境学研究所との環境に関するシンポジウム開催【中止】

上記、太平洋事業(8)を参照。

(6) カリブ青年研修【延期】

トリニダード・トバゴ共和国の若手実務者に、日本一ごみの分別ができてきている先進的な取り組みを行っている鹿児島県にある大崎町にてごみ処理についての研修を実施する予定で、現地において人選も進んでいたが、新型コロナウイルス感染症の影響による渡航制限のため、招待が不可能となったため延期となった。

(7) カリブ国歌演奏【予備費・実施】

カリブ諸国の国情についての理解を一層深めるため、カリブ諸国の国歌を紹介することを企画し、一般財団法人100万人のクラシックライブの協力を得て、優れた演奏家たちによるカリブ諸国の国歌演奏をとりまとめホームページ上に公開した。

3. 国際協力に関する講演事業

(1) APIC 早朝国際情勢講演会

① チューク州の干ばつのための貯水タンク支援  
深刻な干ばつに悩まされていたチューク州ウエノ島の状況に鑑み、今後の水不足に備えて貯水タンクの購入・敷設(Chuck Women Council (CWC)が住民向けに行う、貯水管理と衛生に関する研修と啓蒙活動)に対して、2万米ドルの支援を行った。

② ポンペイ州の干ばつのための貯水タンク支援  
ポンペイ州の離島であるカビンガランギ環礁を襲った深刻な干ばつへの支援として、1,000ガロンの水タンクを8基購入し輸送するための費用として、2万米ドルの支援を行った。

③ ポンペイ州キチ地区ウォン村の貯水池・排水システム改修プロジェクト支援  
ポンペイ州ウォン村の貯水池・排水システム改修のための支援として、2万ドルの支援を行った。脆弱な水インフラを設備の修復を支援することで、ポンペイで発生した干ばつによりさらに深刻化する飲料用の水不足の改善が期待できる。

(7) APICとMCTとの協力事業(大学院生支援)【実施】

APICとMCTとの連携協定に基づき、MCTの推薦により毎年ミクロネシア3カ国から留学生2名を受入れ、上智大学大学院地球環境学研究所で修士号を取得させるプログラム、長期的観点から環境関連に携わる人材の育成支援を目的としており、2017年のプログラム開始以降、現在では3名の学生がそれぞれの研究テーマを持ちながら日々、研究に打ち込んでいる。第1期生2名が2019年9月に、第2期生は1名が2020年9月に、1名が2021年3月に卒業し、第3期生は1名が2021年9月に、1名が2022年3月に卒業予定で、2021年9月には2名が入学することになっている。

(8) 上智大学地球環境学研究所との環境に関するシンポジウム開催【中止】

上智大学との連携協定に基づき、これまで環境セミナーを開催してきた国や環境関連団体とのネットワークを構築することとし、上智大学大学院地球環境学研究所と共催シンポジウムを上智大学にて開催してきた。今年度はオンラインで開催され、上智大学でのシン

令和元年度は下記の通り、外務審議官、局長クラスの幹部を講師として招き、国際情勢、外交、経済に関する講演と意見交換会を実施したが、1月から3月にかけて予定していた講演会は新型コロナウイルス感染症拡大による緊急事態宣言を受けて中止・延期した。

(2) 国際協力懇話会

本年度は、地方開催として、島根県隠岐郡海士町にて、APIC寄付講座「夢ゼミ」を開催し、APIC理事の山本達也エーオンジャパン(株)代表取締役社長が講師として、佐藤常務理事が同行し実施した。県立隠岐島前高校の生徒などを前に、世界120カ国に拠点のあるグローバル企業の日本社長としての経験から、日本の独自性とは、他の外国との違いは、などについて講義を行った。APIC寄付講座の開設は、2019年10月に海士町と締結した連携協定の事業の一環としてのものである。

4. 留学生奨学金事業

ザビエル高校(ミクロネシア連邦チューク州)は、ミクロネシア連邦のみならず、パオオ、マーシャル諸島の最優秀の生徒が入学する高校で、イエズス会が運営。同高校は、ミクロネシア連邦のモリ元大統領を始めそれぞれの国のリーダーとなっている卒業生を多く輩出している。かかる状況に鑑み、APICが上智大学と協力して開始した本件「留学生制度」については、3カ国の首脳の間で極めて高い評価を得ている。当該留学生協定に基づき、2014年から留学生の支援を開始、既に3名の卒業生を出し、現在6名の学生が在籍している。2020年の春学期からコロナウイルスの影響により、帰国中、及び新規入国の学生は日本に来ることができない状況が続いている。そのため、母国からオンライン授業を受ける他、ネット環境の都合により授業に参加できない学生は休学をするなどし、入国の制限が解除されるのを待っている状況である。2021年秋には1名の卒業を予定しており、卒業後に帰国ができない学生についても、無事に帰国ができるようになるまで、支援をしていく。APICとしては今後も募金活動を積極化するとともに、留学生に対する生活費等の支給を含め留学の支援を行っていく。(なお、APICは旅費、生活費を負担、上智大学は学費、寮費を負担。)

ンポジウムは開催されなかったため、APICの直接的な関与はなかった。

(9) ナンマトル遺跡保存支援事業【延期】  
ユネスコ世界遺産に登録されたFSMボンペイ島のナンマトル遺跡について、保存の支援の一環として、昨年度はこれまで会報誌にて掲載していた片岡教授執筆の遺跡に関する解説をとりまとめ、冊子を製作した。外務省の草の根無償によるビジターセンターの建設の起工式が2020年5月24日に行われ、建設完了後に案内板の設置について支援を行う予定であったが、建設工事の遅れもあって、案内板の拙著についての調整がAPICの年度内に行えず、継続となった。

(10) ミクロネシア写真展【実施】

過去に、上智大学(2017年5月)、津田塾大学(2017年10月)、日本・ミクロネシア連邦外交樹立30周年記念式典(2018年11月)、東洋大学(2018年11月・12月)と合計4回の「南洋の光」と題したミクロネシア写真展を開催した。今年度は島根県隠岐郡西ノ島町・海士町・知夫村がミクロネシアのオリンピック・ホストタウンとなったこともあり、2020年11月3日に海士町において写真展を開催した(主催:APIC、共催:島根県隠岐郡西ノ島町・海士町・知夫村及び駐日ミクロネシア連邦大使館)。現在、隠岐島前三島を巡回中。

(11) 高校生スタディツアー【延期】

上智福岡高校が生徒をミクロネシア連邦チューク州に派遣し、ミクロネシア連邦と日本の歴史のつながりについて理解を深めさせるとともに、現地において環境問題改善のための取り組みに参加させることを計画しているため、APICとして若い世代の育成の一環として側面的に支援するもの。生徒がホームステイやザビエル高校への訪問を通して異文化理解を促進することを支援。「ザビエル高校生招待計画」と合わせ、日本とミクロネシア連邦の高校生による相互交流を実現するものとして計画していたが、新型コロナウイルス感染症の影響による渡航制限のため、実現出来なかった。

(12) ザビエル高校生招待計画【中止】

APICが奨学金制度で支援しているザビエル高校の生徒4名と引率教職員1名を招待し、上智大学で

令和二年度 決算報告

(簡略版)

	(単位:円)			(単位:円)		
	平成30年度決算	令和元年度予算	令和元年度決算	平成30年度決算	令和元年度予算	令和元年度決算
<b>1. 収入</b>	<b>86,151,150</b>	<b>76,553,000</b>	<b>94,368,048</b>	<b>87,318,955</b>	<b>127,852,765</b>	<b>87,300,977</b>
a. 基本財産運用収益	5,086	3,000	2,832	37,262,582	54,200,000	28,390,513
b. 特定資産運用収益 (太平洋基金・カリブ基金)	55,782,497	48,000,000	64,225,400	17,875,395	25,900,000	19,476,397
c. 維持委員会費	20,281,666	19,000,000	21,562,438	5,243,269	9,300,000	5,538,218
d. 受取寄付金	4,180,000	1,500,000	520,000	3,796,221	3,900,000	2,438,191
e. 雑収入	5,901,901	8,050,000	8,057,378	23,141,488	34,552,765	31,457,658
<b>当期収入合計</b>	<b>86,151,150</b>	<b>76,553,000</b>	<b>94,368,048</b>	<b>20,400,911</b>	<b>26,165,335</b>	<b>23,425,380</b>
<b>前期繰越</b>	<b>438,860,829</b>	<b>438,800,000</b>	<b>413,048,975</b>	<b>8,063,760</b>	<b>9,960,000</b>	<b>9,519,438</b>
<b>合計</b>	<b>525,011,979</b>	<b>515,353,000</b>	<b>507,417,023</b>	<b>12,337,151</b>	<b>16,205,335</b>	<b>13,905,942</b>
				<b>107,719,866</b>	<b>154,018,100</b>	<b>110,726,357</b>
				<b>417,292,113</b>	<b>361,334,900</b>	<b>396,690,666</b>
				<b>525,011,979</b>	<b>515,353,000</b>	<b>507,417,023</b>
				<b>2,832</b>	<b>2,832</b>	<b>2,832</b>
				<b>64,225,400</b>	<b>64,225,400</b>	<b>64,225,400</b>
				<b>21,562,438</b>	<b>21,562,438</b>	<b>21,562,438</b>
				<b>520,000</b>	<b>520,000</b>	<b>520,000</b>
				<b>8,057,378</b>	<b>8,057,378</b>	<b>8,057,378</b>
				<b>20,400,911</b>	<b>20,400,911</b>	<b>20,400,911</b>
				<b>26,165,335</b>	<b>26,165,335</b>	<b>26,165,335</b>
				<b>23,425,380</b>	<b>23,425,380</b>	<b>23,425,380</b>
				<b>8,063,760</b>	<b>8,063,760</b>	<b>8,063,760</b>
				<b>12,337,151</b>	<b>12,337,151</b>	<b>12,337,151</b>
				<b>107,719,866</b>	<b>107,719,866</b>	<b>107,719,866</b>
				<b>154,018,100</b>	<b>154,018,100</b>	<b>154,018,100</b>
				<b>110,726,357</b>	<b>110,726,357</b>	<b>110,726,357</b>
				<b>417,292,113</b>	<b>417,292,113</b>	<b>417,292,113</b>
				<b>525,011,979</b>	<b>525,011,979</b>	<b>525,011,979</b>



**APIC では維持会員（法人会員・個人会員）を募集しております。**

APIC 維持会員の皆様には毎月開催される外務省幹部・大使による **APIC 早朝国際情勢講演会** を自動的にご案内するほか、非会員で参加をご希望の方にもご案内を行っています。詳細につきましては、APIC 事務局にご照会ください。

**場所** ホテルオークラ東京 会議場  
**時間** 午前 8:30 ~ 10:00 (朝食付き)

**お問い合わせ** TEL: 03-5577-2900  
EMAIL: [apicinfo@apic.or.jp](mailto:apicinfo@apic.or.jp)

令和 4 年 1 月 1 日 発行

■ 発行人 重家 俊範

■ 発行所 一般財団法人 国際協力推進協会  
〒102-0094 東京都千代田区紀尾井町 6-12 紀尾井町福田家ビル 3 階  
TEL: 03-5577-2900 FAX: 03-5577-2901  
URL: <http://www.apic.or.jp/>

■ 編集 編集長 加藤 奈美  
編集 斉藤 拓馬  
喜多 萌子  
金原 弘恭